

音楽科教育における「思考力」と「説明力」の育成試論 ——「指示的意味」と「内包的意味」を識別して言語化する試み——

*An Upbringing Preliminary Essay of "Intellectual Power" and "Explanation" in School Music
A Try of Become a Language on Distinguishing of "Reference" and "Sense"*

田畑 八郎 *Hachiro Tabata*
(音楽学部)

I. はじめに

音楽科教育において、今なぜ「思考力」と「説明力」なのか。この問いかけには、感受力と表現力を重視する音楽活動への批判がある。つまり、音楽の美しさを感じて表現に結びつける活動は熱心であるが、音楽がなぜ美しいのか、その理由を考え、言語化して人に伝える教育の軽視に対する批判である。言い換えれば、現在行われている音楽科教育の中で、もう少し音の動きや構成について思考する力と、音楽の美しさを説明する力を身に付けさせよう、という問題提起である。この問題提起を行う背景には次のような問題事象がある。

- ①楽譜に示された記号や発想用語に忠実過ぎて、音楽的な表情が感じとれない演奏
- ②教師の範唱に続けて模倣的に歌わせる歌唱指導
- ③和音の働きやフレーズのまとまりを考えずに歌詞の内容を優先させた歌唱指導
- ④なぜ感動したのか、その理由を考えずに、ただ「よかった」「楽しかった」などの言葉で音楽の美しさを感じ付けている現実

上記の4点は何が問題なのか。まず、楽譜の中に提示された音符の動きや記号、標語等から音楽美に対する法則と、法則を組み立てている原理を知って演奏する必要があること。そして、音楽の美しさについて、自信をもって他者に語ろうとする態度が必要なこと、などである。

以上の理由により本研究では、音楽科教育の中で思考力と説明力を身に付ける方策を研究することにした。そのために、言語学を援用して、楽譜の中に使われている記号や諸要素の働きについて、「指示的意味」と「内包的意味」を見出し、これを識別して言語化することを試みた。

II. 研究の目的

本研究の目的は、音楽表現をより豊かにするために、今何が必要で、また、何が不足しているかを明らかにすることである。そして、どのようにしたら思考力と説明力が養われるのか、その手法を探求することである。そのために、「指示的意味」を心的に膨らませた「内包的意味」に読み替え、これを実際の音楽活動に生かすために、自分の言葉でどう説明し

たらよいのか、その言語化の方策を見いだすことをねらっている。

1. 説明力（言語表現力）の実態

説明力の実態については「はじめに」でも触れたが、音楽科の授業や課外活動等で接する限りにおいては、決して満足できるものではない。もう少し音楽的用語や標語等に関する言葉を正確に把握して、音楽の感動について積極的に発言できるようになれば、納得できる説明が可能になるものと思われる。そこで本研究では、単に指示したシンボリックな記号や用語の意味（指示的意味）をそのまま使わないようにして、心的な意味に置き換えた音楽表現に役立つ言葉（内包的意味）で説明できるように、その方法論を提示するものである。

2. 平成 20 年版中央教育審議会答申における「言語力」と「思考力」の捉え方

平成 20 年 1 月 17 日、中央教育審議会は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について答申を行った。この「答申」の中で「言語力」に関しては、「7. 教育内容に関する主な改善事項」として示した七つの項目のうち、トップ項目として「(1) 言語活動の充実」を挙げている。

また、「思考力」については、同答申の「5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方」として示した七つの項目のうち、四番目に「(4) 思考力・判断力・表現力等の育成」として示している。

3. 新学習指導要領における「思考力」と「説明力」の捉え方

文部科学省は、平成 20 年 3 月 28 日に学校教育法施行規則の一部改正と中学校学習指導要領の改訂を行った。中学校においては新学習指導要領等は平成 24 年度から全面的に実施するとしているが、平成 21 年度から移行措置として一部を先行して実施している。

「思考力」についての記述は、改正された教育基本法や学校教育法等の規定にのっとり、平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申を踏まえて改訂された新学習指導要領の中に、基本的なねらいとして示した三つの事項のうち、二番目に「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること」と示されている。

これを受けて中学校各学年の鑑賞(1)のアには、音楽を聴いて「言葉で説明するなどして」(第 1 学年)、「根拠をもって批評するなどして」(第 2・3 学年)という文言で新たに示されている。

この事項は、今回小学校の「鑑賞」に新たに導入された「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして」という指導内容の延長線上にあるものである。

Ⅲ. 研究の方法と手順

本研究における研究の方法と手順を要約すると以下の4点である。

- ①音楽科教育における思考力と説明力の必要性については、中央教育審議会答申、新学習指導要領の資料研究と文献による理論的研究
- ②指示的意味と内包的意味については、文献による理論的研究
- ③思考力を説明力に導くことの必要性については、指導に当たっている学校現場や社会教育団体等で得られた実践的研究
- ④本論の学習指導案については、大学の教職科目での実践的研究

Ⅳ. 研究の内容

1. 「思考力」とは

(1) 「思考力」の概念規定

「思考力」とは、われわれが為すことと生ずる結果との間に特定の関係を発見して、両者がよりよい方向や方法などを見出そうとする資質や能力をいう。また、作られた現実とモデルとの交流を通して、動的な意味を生み出す構造化された心の働きや作用をいう。優れた思考とは、生き生きとしたイメージと正確で厳密な概念の動的な相互作用が行われている状態を指す。そして、人は思考によって反応行動を起こし、問題解決のための条件や方法、可否を検討しようとする傾向をもつ。それゆえ、学校教育においては、思考力を育成する意義は、基本的には問題解決能力の育成にあるといえる。この考えを音楽科教育の思考力を育成する場面に当てはめた場合、例えば、クレシェンドは物理的な「だんだん強く」ではなく、心理的に「心をこめてだんだん強く」となる。ここでは、よりよい音楽表現をするためにいろいろ思考して、心的要因を加えて解釈した方が納得する音楽表現ができるということに気付くことができたため、問題を解決した（良い演奏ができた）ことになるのである。

これに対し、思考するためには「疑問」をもつことが重要だという考え方もある。疑問の最大の源泉は、自己の知覚データとイメージが、概念や命題にひきなおせぬものを含んでいることに気付くことである。このことから、思考とは、ものごとに対してたえず疑問をもって、外的作用によらず、内的方法によって、ものともとの間に関係をつけ、「解決する適応の仕方を発見すること」とも定義できる。

(2) 思考力を養う理由

思考力を養うことによって得られるメリットを簡条的に述べる。

- ①内発的な学習意欲が喚起される。
- ②「よりよく生きたい」という思いや願いを実現するために、表現や行動についての方向性や方法を見出すことができる。

- ③行動を起こす際に、用いる言葉や象徴機能まで変化するようになる。
- ④一定の経験により、抽象、判断、推理などの思考がよりよくできるようになる。
- ⑤イメージや知識のような心的表象から推論、創造性の過程にまで、広い拡がりをもつ思考を研究対象にするようになる。

(3) 想像的思考力

音楽科教育で思考力を養うには、イメージと関わる想像的思考力を身に付けることが重要と考える。想像的思考力とは、過去の経験から得られたイメージを再構成し、新たな心像を構成することができる能力をいう。「イメージする」ということは、現実のあるべき姿を受動的に複写するのではなく、外界に積極的に働きかけ、イメージとイメージの新しい結合の中に価値ある「心的生産」を生み出すことである。ここでの新しい発見が表現活動を活性化して、文化的・社会的に価値のある新しい着想や作品を生み出すことになる。

音楽活動で想像的思考力を重視する理由の一つに、単調な音楽表現の回避が挙げられる。例えば、書かれている歌詞を単に朗読調で読むような気持ちで歌ったとしよう。想像的思考力が働かなかった場合、本来感得したであろう触覚・嗅覚・味覚等の感覚が遠のいて無味乾燥な歌唱表現になる。ここでイメージ力を働かせると、歌詞の内容に応じた触・嗅・味の感覚が呼び起こされ、より豊かな歌唱表現が期待できるのである。

2. 「説明力」とは

説明力とは、事柄の内容や理由、意義などを分かりやすく述べる力のことをいう。本論でいう「説明力」は、「この音楽はなぜ美しいのか」を説明できる力に尽きる。つまり、音の動きや構成について思考・理解し、音楽の美しさを言葉で表現する力を身に付けることをねらっているのである。話し手のうまい言い表し方とは、受け手との間に共通の背景と一緒に体験した知的経験を共有して、一人でも多くの人に理解されるように、同次元的な話をするのである。

3. 思考力を説明力(言語化)に結びつける必要性

本研究において思考は内的な言語活動だと捉えている。その理由は、自分の決断や未来の可能性を肯定的に信じる心の重要性は誰でも意識することはあるが、「自己の信念の方向性」は「繰り返される内言(内的な言語活動)」によって規定される部分があると考えたからである。自分が自分に語りかけるポジティブな言説は、自己の決断への自信を強くするばかりでなく、未来への展望と成功の予測に従った行動へと無意識的に駆り立てる。「なぜそう思うのか」を思考的な裏付けによって言葉で説明し、「どのように演奏したいのか」を根拠をもって説明することができれば、高いレベルの音楽内容を追求でき、より奥の深い演奏が可能になるのである。

4. 「指示的意味」と「内包的意味」

「指示的意味」とは、記号が対象や状況に対して持つ関係をいい、「内包的意味」とは、記号がほかの記号（特に概念といわれる心的記号）に対してもつ関係をいう。前者は指令的行為の力を持ち、後者は言語の心理学的特性と社会的特性の両方の力をもつ。音楽用語で説明するならば、*rit.*（リタルダンド）は、指示的意味では「だんだん遅く」、内包的意味では「気持ちをゆるめながらだんだん遅く」、又は「膨らませながらだんだん遅く」などとなる。

内包的意味は情緒的（affective）、連想的、含意的、暗示の意味であり、言語文化や個人のイメージや経験に依拠する。たとえば、「愛」について、ただ「恋」といえば指示的意味だが、「母親のような気持ち」といえば内包的意味になる。このように比喩表現は内包的意味に依拠する。音楽活動における内包的意味は、作曲の意図や演奏者の主張を感情的・心的言葉で求める場合が多い。本研究では内包的意味を用いて説明できるようになれば音楽表現力が高まると主張している。指示的意味と内包的意味の具体的内容を以下に示す。ここでは、記号・標語と短い語句の数例だけを挙げる。演奏のときに用いるほかの音楽用語についても、この対比表を膨らませた応用例の形で、実際の演奏表現や説明力に活かすことが可能だと考えている。

表 1 指示的意味と内包的意味の対比表

	記号・標語	読み方	指示的意味	内包的意味
			記号や標語等が指し示す直接的な意味	指示的意味に主張、要求、暗示、比喩、意図等を含めた心的意味
1	<i>crescendo</i>	クレシェンド	だんだん強く	気持ちをこめてだんだん強く
2	#	シャープ	半音上げる	導音的な働きを持たせて半音上げる
3	b	フラット	半音下げる	短三和音的な響きを求めて半音下げる
4	Adagio	アダージョ	ゆるやかに	くつろぐ気持ちでゆるやかに
5	Tempo I	テンポ プリモ	最初の速さで	気持ちを切り替えて最初の速さで
6	<i>ritardando</i>	リタルダンド	だんだん遅く	気持ちをゆるめながら（膨らませながら）だんだんゆるやかに
7	<i>legato</i>	レガート	なめらかに	音の間に切れ目を感じさせないように、結びつけるように
8	>	アクセント	目立たせて強調して	前後の音と比べて臨時的に特に強めに
9	主要三和音	しゅようさんわおん	音階のI, IV, Vの上に構成される三和音	音階の主音（I度）上に構成される完全5度上下の三和音

10	属七の和音	ぞくしちのわおん	Vの和音に7度上の音を加えた和音	自然的解決を目指して主和音へ進行する属音上の7の和音
11	コードネーム	コードネーム	英語音名による和音の呼び名	根音をイギリス音名で記した和音の略記法
12	D.C.	ダカーポ	始めにもどる	始めから <i>fine</i> と記されたところまでくり返す
13	音程	おんてい	音と音との高さの隔たり	2音間の高さの隔たり。順次に又は同時に鳴る2音の合音
14	リズム	リズム	律動	運動と秩序の間の関連性
15	無調の音楽	むちょうのおんがく	調性の無い音楽	中心となる主音をもたない音楽

5. 「思考力」と「説明力」を育成する学習指導案

中学校第1学年音楽科学習指導案（鑑賞）

日 時：平成 年 月 日（ ） 第 校時
 場 所： 市立 中学校 音楽室
 学 級：第1学年 組男子 名 女子 名計 名
 指導教諭： 先生 印
 授業者：教育実習生 印

(1) 題材名

「詩と音楽が一体となった歌曲の美しさを感じ取り、そのよさを言葉で説明できるようにしよう」

(2) 題材設定の理由

今回の学習指導要領の改訂では、言語活動の充実をねらう観点から、音楽教科においても鑑賞領域に「言葉で説明する」(1学年)や、「根拠をもって批評する」(2・3学年)などの活動内容が示された。これらの事項では、音楽を形づくっている要素や構造と曲想のかかわりを感じ取って(理解して)聴き、言葉で説明したり、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わう能力を育てることをねらいとしている。音楽で感得したことを言葉で説明することは、音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する主体的な行為につながるため、鑑賞教育上、有効な手段になりうるものとする。

そこでこの題材では、詩と音楽が一体となった歌曲の表現のよさを感じ取る活動を通して、生徒が音楽に関する用語やその意味などを知り、それらを適切に用いて言葉で表すことができることをねらいとした。

ここで主教材として取り上げたシューベルト作曲の「魔王」は、ゲーテの詩に基づいて

魔王の意味を考えさせたり、4名の登場人物が一人で歌唱する面白さを提示するほか、蹄の音を描写した連打や恐怖をあおる上行音程など、巧みな表現力が駆使されているため、音楽の内容を価値あるものとして自ら確認し、意欲的な発表を促す教材として有効と考える。この教材を鑑賞することによって、自ら進んで音楽を楽しむ力を身に付けさせ、音楽の楽しみに対する新たなアプローチ法も学ばせたい。

(3) 題材の目標

- ①詩と音楽とが結びついた歌曲の美しさの理由を考え、その表現のよさを感じ取れるようにする。
- ②音楽のよさや美しさを言葉で説明できるようにする。
- ③シューベルトの音楽とリートに親しみ、歌曲の表現形式に「有節」と「通作」があることを理解させる。

(4) 指導内容（新学習指導要領の指導事項）

[鑑賞分野の指導事項との関連]

- ①音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わわせる。〈B鑑賞(1)ア〉
- ②音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて鑑賞させる。〈B鑑賞(1)イ〉

[共通事項との関連]

- ①音色、リズム、速度、旋律、強弱、形式、構成などを知覚し、楽曲の特質や雰囲気を感受させる。〈共通事項(1)ア〉
- ②音楽を形づくっている要素とそれらの動きを表す用語や記号などについて、音楽活動を通して理解させる。〈共通事項(1)イ〉

(5) 使用教材（楽曲）

「魔王」ゲーテ作詞（1749-1832）シューベルト作曲（1797-1828）、日本語版・ドイツ語版のCD、リスト編曲・ピアノ独奏のCD

魔王とは、北欧の伝説に由来し、人を死の世界へ誘う精霊の王のことを指す。語り手、父親、息子、魔王の4名の台詞を一人に歌い分けさせ、ピアノ・パートには音型による心理描写をさせている。減七の和音の多用や、頻繁な転調が不安をあおる。この教材は、歌唱芸術に対する理解を深めるとともに、詩と音楽が協働して作り上げる豊かな表現の世界を味わうことができるため、生徒たちに大変親しまれ好まれている楽曲である。

(6) 題材の評価計画（評価規準）

- ①音楽への関心・意欲・態度
詩と音楽によって生み出される音楽のまとまりに関心をもち、意欲的に鑑賞している。
- ②音楽的な感受や表現の工夫
音色、リズム、速度、旋律、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要

素同士の関連を知覚し、楽曲の特質や雰囲気を感じている。

③鑑賞の能力

音楽を構成する原理を他の芸術と関連付けて理解し、楽曲のよさや美しさを自分の言葉や身振りなどで伝える能力を身に付けている。

(7) 指導計画 (全 3 時間扱い・本時 1 / 3)

第 1 時(本時) : ①歌と伴奏の効果から、劇的な内容を想像させる。

②歌詞による物語の内容を把握させ、作詩者・作曲者について理解させる。

③「魔王」を聴いてその美しさを言葉で説明させる。

第 2 時 : 声の変化(音色、音高、調、強弱)や伴奏のリズム、音型などによる表現の効果を感じ取らせる。

第 3 時 : シューベルトの音楽とリートを理解させる。

(8) 本時の目標

歌と伴奏の効果から、歌曲の表現内容を感じ取り、その美しさを言葉で説明しよう。

(9) 本時の学習指導の展開 (全 3 時間扱い・第 1 時)

表 2 本時の学習指導案

指導内容	学習活動	教師の働きかけ	評価
⑤指示的意味(何を学習するのか直接的な意味を知る)	生徒が主体的に行う学習活動	⑨内包的意味(何を理解させるのか主張、要求、暗示、比喩、意図等の中味を明らかにする)	⑩言葉で説明(学んだことを分かりやすい言葉で説明する)
1. 邦訳歌詞での鑑賞 ⑤詩の朗読 ⑤グループ活動	○日本語歌詞で「魔王」を全曲聴く。 • 曲の感じについて話し合う。 • 詩を朗読して、内容をつかむ。 • グループに分かれ、物語のあらすじを発表する。	□原曲はピアノ伴奏の独唱曲であることを説明する。 ⑨比喩等を用いて言葉の意味をしっかりと捉えさせる。 ⑨登場人物をメモさせ、登場者の役割を考えさせる。	■興味をもって聴こうとしているか。 ⑩主語と結尾語をはっきりさせて分かるように説明できたか。 ⑩登場人物を口に出して言えたか。
2. 目標の確認	歌と伴奏の効果から、歌曲の表現内容を感じ取り、その美しさを言葉で説明しよう		
3. 物語の内容の把握	○語り手、父、子、魔王の雰囲気を生かした朗読をする。	□言葉の感じを生かして朗読させる。	⑩言葉に抑揚をつけた理由を説明できたか。

<p>⑤分担任朗読</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●登場人物を分担して朗読する。 ●互選により登場人物すべてを一人で朗読する。 	<p>⑨暗示する場面を想像しながら朗読させる。</p>	<p>■人に伝わる発音、声の響きであったか。</p>
<p>4. 原語歌詞での鑑賞</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○原語歌詞で全曲を聴く。 ●日本語との言葉の違いや音色に注意しながら聴く。 ●教科書に示されている言語の部分に注意して聴く。 	<p>⑩日本語との発音や音色の違いを理解させ、旋律の構成について把握させる。</p> <p>□特に教科書に示されている単語については、実際に音読させる。</p>	
<p>⑤イメージ学習</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○原語歌詞によるイメージと自分のもっているイメージについて話し合う。 	<p>⑪感覚的なイメージから意図されるものを暗示して話し合いをさせる。</p>	<p>⑫自分の考えを適切な言葉で説明できたか。</p>
<p>5. 作曲者・作詞者の理解、発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○作曲者シューベルトについて調べる。 ○作詞者ゲーテについて調べる。 	<p>□「魔王」が作曲されたときの背景や、伴奏を作るときのエピソード等を紹介し、他の作品についても簡単に説明する。</p>	<p>■積極的に調べる姿勢があるか。</p>
<p>⑤時代背景の調査</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●それぞれの生い立ちや作品等を、教科書を読んだり調べたりして発表し合う。 ●「魔王」の作られた年代や背景等について発表し合う。 ●教科書にあるエピソード等を通してシューベルトの時代の背景を知る。 	<p>⑬意見に対しては反論して自分の考えを主張してよいことを伝える。</p>	<p>⑭時代背景のおおよそを説明できたか。</p>
<p>6. 伴奏音型の感得、発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ピアノ伴奏の劇的效果について感じ取る。 		<p>■ピアノ伴奏の変化について適切な意見をもっているか。</p>
<p>⑤情景の感得</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●三連符の連打が作り出す雰囲気について話し合う。 ●場面によってどのように伴奏が変化するかを発表し合う。 	<p>⑮三連符の連打から暗示される意味を理解させる。</p> <p>□リズム、強弱、調等の面からも発表できるようにアドバイスする。</p>	<p>⑯正しい音楽用語を使って正確に説明できたか。</p>
<p>7. 学習のまとめ ⑤課題の確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○目標を確認し、楽譜を見ないで全曲を通して、想像豊かに聴く。 	<p>⑰曲の美しさを言葉で説明できるように予告して聴かせる。</p>	<p>⑱本時の課題は何かについて語れたか。</p>
<p>8. 次時の予告</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○次時の予告と準備について聴く。 	<p>□次時は登場人物による歌い方の違いや表現の効果について学習することを告げる。</p>	

V. 結論と今後の課題

本研究では、まず、なぜ音楽に思考力と説明力が必要なのか、その理由を探った。そして、どうしたら思考力を説明力に結びつけることができるのかその方策を探求し、学習指導案等を提示してその具体的手法を提言した。さらに、説明力を強化するために、言語学の意味論を援用し、これを使って音楽科教育へ応用するための「指示的意味」と「内包的意味」の対比一覧表を提示した。その結果、以下の結論を導き出すことができた。

1. 音楽科教育において思考力と説明力を高めるには、言語学の意味論から指示的意味と内包的意味を援用して、平素の授業の中で言語化することを意識した指導計画を立て、実際に実施することが有効と考える。
2. 指示的意味を内包的意味に直結することができれば、何を理解させるのかの主張、要求、暗示、比喩、意図等の中味を明らかにすることができるため、音楽を構成する諸要素を部分要素に分解し、音相互の関連や働きを理解・認識することができる。
3. 「教科教育法の研究1(音楽)」の授業で思考力と説明力を求める授業を展開したら、学生の音楽表現力が豊かになり、課題意識を積極的に述べるようになった。従って、思考力を言語化へ結びつける活動は、他教科と同様、音楽科においても重要な指導要素の一つになりうるものと考ええる。
4. 音楽科教育で思考力を養うには、イメージと関わる想像的思考力を身に付けることが有効と考える。その理由は、イメージ力は①過去から蓄積された意味と現実の状況とを融合させ、「現存の変容」という質の変化を生ぜしめること。そして、②活動の力を新しいものに変えて意義ある行為を導き出すこと。さらに、③音楽活動をするための諸感覚を組み替え、たえず新鮮な表現力を導き出す力を備えているからである。

今後、新学習指導要領が全面実施され、教育現場で実際に「思考力」と「説明力」を育成する授業が展開されると予想されるが、ここで重要な留意点は、音科の授業においては、音との関連を無視した形で「話し合いの場」を優先させた授業をしてはならない、ということである。本研究においても、このことを念頭に置いて、美的な音楽表現をするために、音と直結した「思考力」と「説明力」を身に付ける方策の開発を今後の課題としたい。

文献

- ①新山王政和『新しい視点で音楽科授業を創る!』スタイルノート 2010
- ②田畑八郎「音楽的情動の喚起要因と喚起手法に関する実践学的研究」——こころの知性(EQ)を育む音楽教育を志向して—— 兵庫教育大学研究紀要 No.34 p.157-169 2009
- ③小原光一『新しい音楽科の学習指導要領をどう読むか』教育芸術社 p.13 2008

- ④田畑八郎「S.K. ランガーの感情教育」——感情の客観化理論を音楽教育に生かす—— 日本学校音楽教育実践学会紀要 Vol.11 p.47-48 2007
- ⑤田畑八郎『音楽表現の教育学』——音で思考する音楽科教育—— ケイ・エム・ピー 2007（第3版）
- ⑥菱谷晋介編著『イメージの世界』ナカニシヤ出版 2001
- ⑦ *The New GROVE Dictionary of Music and Musicians*, Macmillan Publishers Limited, 1980 Japanese Edition Kodansya Ltd. 1994
- ⑧ミシェル・ドゥニ『イメージの心理学』勁草書房 1989
- ⑨黒坂三和子編『子供の想像力と創造性を育む』思索社 1988
- ⑩宇佐美寛『教育において思考とは何か』明治図書 1987
- ⑪ジェフリー・N・リーチ『意味論と語用論の現在』内田種臣・木下裕昭訳 理想社 1986
- ⑫ルードルフ・E・ラドシー／J・デーヴィッド・ボイル『音楽行動の心理学』徳丸吉彦他訳 音楽之友社 1982
- ⑬ Leonard Bunce Meyer ; *Emotion and Meaning in Music*, The University of Chicago Press, 1956